

その狩猟に似たミツバチとの「かけひき」にもまた、楽しみや価値を見出しているのである。

「野生」を養う

運よく、ハチ群がタッコに営巣すれば養蜂の成立である。しかし、タッコを嫌っていつ逃去するかかわからず、つねに不安定な所有がつきまとう。その後、自宅近くにタッコを置き、晩秋に採蜜する。その際、巣もろとも採るため、ハチ群は死滅、逃去を余儀なくされる。一見、残酷に見えるが、それは周囲の自然に、毎年一定数の分蜂群を生む営巣環境が持続されていることのアラわれでもある。

とはいえ、近年、技術に少し変化が起きている。ハチ群を越冬させ、連年で飼養するようになってきた。始めて約一〇年という川島さんは、毎年三五、六個のタッコを仕掛ける。夜勤の仕事をする彼は、分蜂期には帰宅途中、必ず仕掛けたタッコを見回り、時間を惜しんであつたなタッコの製作にも余念がない。彼が作るタッコは、伝統の形を基本に胴部が蜂番で観音開きに開閉するよう工夫されている。また重ね箱状の巣箱も考案中だ。これでハチ群を死滅させず、採蜜できると言っ。

気がつけば、東尾岐に通い始めて一五年が過ぎた。この養蜂は、生業や副業としての経済的価値は皆無に等しい。にもかかわらず、このあいだに、新しく始める人は確実に増えている。それは、この養蜂が人を惹きつけ、熱中させる魅力を内在させているからだろう。

かくいうわたしも、「観察のため」と称して、伝統的養蜂にはまっついでいる一人なのである。

毎年、このケヤキの大木にタッコを仕掛ける



おもに桐や杉の丸太をくり抜き、タッコ(単箱)を製作

菜の花の季節、いよいよタッコを仕掛ける作業が始まる



6月から11月にかけて、川島さんの家の庭には数多くの観音開きのタッコが置かれている



11月、タッコから取り出した巣と蜜を鍋で煮た後、布袋でこして蜂の死骸やゴミを取り除いて採蜜する

生きもの 博物誌

【ニホンミツバチ/日本】

ヤマバチが「来る」季節

佐治 靖

(さし おさむ)

福島県立博物館学芸員

ミツバチとのかけひき

「月刊みんぱく」の読者が、ちよつとこの文章を目にするころ、毎年「ヤマバチが来る」ことを心待ちにしていた東尾岐の人びとは、一喜一憂していることだろう。なぜなら、この季節、仕掛けたミツバチタッコに、何群のヤマバチが飛来し営巣したか、最終的な結果がわかるからである。

福島県会津美里町東尾岐。会津盆地南縁の山間に位置するこの地域では、山野に野生するミツバチ(ニホンミツバチ)をヤマバチとよび、この飼養が伝統的におこなわれてきた。ちなみに、一般に知るミツバチや養蜂は、じつは明治期に移入されたセイヨウミツバチと、その習性を利用した養蜂で、ここで述べるものとはまったく別といつてもよい。

四月下旬、ようやく雪がとけ、東尾岐に遅い春が訪れると、人びとは待ちかねたように、昨秋、小屋や軒下に片づけられていたミツバチタッコを運び出し、内部のゴミやクモの巣をとり除くタッコ掃除を始める。ミツバチタッコ(タッコともいう)とは、ヤマバチを飼養する巣箱である。巣箱といつてもその形は独特で、輪切りにした丸太の内部をくり抜き、上下に板を当て、下部の一方所に小さな出入口を刻んだ単純で素朴な道具である。遠目には単なる丸太と見間違えるほど、「より自然に」を特徴としている。

五月、いよいよ「ヤマバチが来る」季節の到来である。周囲の山野に生息するヤマバチが単分かれ分蜂をする。これを東尾岐では「来る」と表現してきた。分蜂したハチ群が、あらたな棲み家として、それぞれの仕掛けたタッコ

コを気に入り、棲みつくかどうか、その年の飼養を左右するのである。

人びとは、自然知ともいうべき、経験に裏づけられたヤマバチが好む場所、たとえば木の根元、お堂の軒下などにタッコを仕掛けて歩く。しかし、ただ置くのではない。よく見ると日照や風向きなどが考慮されている。また定期的に見回ってハチの飛来を確かめ、その折、タッコ内部や出入口に古い蜜や蟻を塗るといったハチ群を「誘う」働きかけがこまめに繰り返される。タッコは、巣箱である前にハチ群をおびき寄せるとらップなのである。

こうした行動にあらわれるように、人びとの目的は、単に蜂蜜の獲得だけではない。野生のミツバチを自分のものにできるかどうか、

ニホンミツバチ

(学名: *Apis cerana japonica* Rad.)

ニホンミツバチは、日本の山野に野生する在来のミツバチで、アジアを中心に生息するトウヨウミツバチ(*Apis cerana* Fabricius)の一種。北は青森県下北半島、南は鹿児島県大隅半島に至る広範囲に生息する。トウヨウミツバチのなかで、もつとも北に生息することから「北限の *Apis cerana*」と称される。近代養蜂で利用されるセイヨウミツバチ(*Apis mellifera* L.)とは種が異なり、サイズも小さい。また振動・移動に敏感で逃去性が高く、巣の「かじり行動」がある。地方によりヤマバチ、ジバチ、ミツ、ワバチなどとよばれ、いくつかの地域で飼養が確認されている。



写真提供: 玉川大学ミツバチ科学研究施設